

ネギのIPM実践指標モデル

次の管理項目や管理ポイントを例にして、地域の病害虫や雑草の防除状況に応じたモデルをつくりIPMに取り組みましょう。

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		昨年は？	今年は？
健全な種子の確保	病害等の污染の心配がない健全な種子を確保する。		
	栽培時期にあった品種を選択する。		
健全苗の育成	病原菌に污染されていない培土や資材を用いる。		
	適正な播種量を守り、発芽までは湿度を十分保ち、発芽後は過度の灌水を避ける。		
	育苗施設や育苗ほ場への害虫侵入を抑制するため、防虫ネット設置等の物理的防除手段を講じる。		
ほ場の選択と改善	作物の栽培に適した水はけの良いほ場を選択する。		
	やむを得ず排水の悪いほ場に作付けする場合は、高畦やほ場周辺に溝を設置するなどの排水対策を講じる。		
栽培ほ場と周辺の雑草管理	ほ場への雑草種子の持ち込みや雑草を発生源とする害虫の発生を抑制するため、ほ場その周辺の雑草防除に努める。		
は種・定植	適正な植え付け密度とする。		
	は種・定植前に、雑草や土壌病害、ネギハモグリバエ対策の土壌消毒を行う。		
耕種的防除	同一ほ場での連作を避け、休作期間を設けるか、異科作物との輪作を行う。		
	収穫後の残さは、病害虫の発生源となるため、適切に処分する。		
	こまめに生育を観察し、適切な肥培管理や水分管理に努める。		

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		昨年？	今年？
物理的防除	うね上をもみがらやマルチフィルムなどで覆い、雑草を抑える。		
生物農薬の利用	適用のある病害虫に対して、B T剤などを用いる。		
病害虫発生予察情報等の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し、確認する。 フェロモントラップ等を用いて周辺の病害虫発生状況を確認する。		
病害虫防除の要否の判断	ほ場内を見回り、病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象予報等を考慮して防除の要否を判断する。		
	要防除基準（良品基準）に基づき、防除が必要と判断した場合には、確実に防除を実施する。		
農薬の適正使用	同一系統薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。		
	生育に合わせ、十分な薬効が得られる範囲で、最小の使用量となる最適な使用方法を考える。		
	農薬ラベルに書かれている使用基準を守る。		
	農薬は対象病害虫の発生部位に付着するよう散布し、散布後には付着を確認する。		
	農薬を散布する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で実施する。		
	病害虫防除所などから病害虫の薬剤抵抗性の発達状況に関する最新の情報を入手し、薬剤を選択する。		
作業日誌の記帳	作業内容や病害虫・雑草の発生状況のほか、農薬を使用した場合は、その名称、希釈倍数や使用量などを記録する。		
	作業日誌は、概ね3年間保管し、次作の参考にする。		
研修会への参加	県や農協などが開催する栽培講習会、I P Mや農薬安全使用に関する講習会などに、年に1回は参加する。		